

『閱微草堂筆記』に見る紀昀の学問論

五嶋久弥子

一

清朝に四庫全書館が開かれた時にその総纂官として活躍したほどの大学者紀昀には、自己の学術的な著書はなく、そのかわりに志怪小説『閱微草堂筆記』が一大事業を成し遂げた後の、晩年の唯一の著書として残されている。⁽¹⁾「灤陽消夏録」の「自序」では「都べて体例なし。小説稗官は、著述に関わること無きを知るも、街談巷議も、或は勸懲に益有らんか」と述べ、「姑妄聴之」の「自序」では「今老いたり、復た当年の意興なく、惟だ時に紙墨を撚り、旧聞を追録し、姑く以て歳月を消遣するのみ」とあるように、紀昀自らは単に老人の手すさびにすぎないと述べているが、実際にはそうした追憶談や勸善懲惡の因果談などの他に、さすが一代の碩学と思わせるような学問的な話が多く混在している。「小説」ではあるが、当然そこには学者としての紀昀の見識が伺える。

魯迅の『中国小説史略』を見ると、「聊以遣日」の書ではあるが、厳格に法を立てて、質を尚び華を黜けていること、特に当時盛行していた『聊齋志異』を「才子の筆」ではあるが「著書する者の筆」ではないとしてこれに対抗しているということなどを指摘している。また、思いつきで空談することを喜ばなかった紀昀は、宋儒に対して特に「違言」が多く、書中折に触れてそのことを述べ、『四庫総目提要』中の評価とまさに一致するとも言及している。

姑妄之 聴之	槐 西 雜 志					如 是 我 聞				
	4	2	2	1	1	4	4	4	2	1
4	2	2	1	1	4	4	4	2	1	
21	12	34	13	26	6	47	37	36	32	44
新齊諧載冥司	有講學者論	東光有王莽河	相去數千里	三從兄曉東言	石中物象	后漢敦煌太守	裘文達公言	人物異類	余布衣蕭客言	姜白岩言
		丐婦	士人	丐婦、 豚、牛				劉師退	士人	士人
			古粧 女子				狐鬼	狐	鬼	山之神
新齊諧	無鬼論				硯	碑				
至其講學辟佛、…亦未免重視留良耳、	余曰、重齋千里、…此誠非末學所知也、	孫復作春秋尊王發微、二百四十年內有貶無褒、胡致堂作讀史管見、三代以下無完人、辨則辨矣、非吾之所欲聞也、	相去數千里、以燕趙之人談滇黔之俗、…元程端學推波助瀾、尤爲悍戾、	故余于漢儒之學、最不信春秋陰陽、洪範五行傳、于宋儒之學、最不信河圖洛書、皇極經世、	世傳河圖洛書出于北宋、…遂以太乙九宮眞爲神禹所受也、	宋儒曰、漢以前人皆不知、吾以理知之也、其類此夫、				
宋以後の儒者は事々皆空談というコメントをのせる。	朱子は「無鬼」とは言っていないことを証明する。	孫復の『春秋尊王發微』を批判する。	宋元代の春秋学について。	漢学・宋学の中で紀昀が最も信じられないものをそれぞれあげる。	河図洛書について。	「易」の象数、「詩」の小序、「春秋」三伝の端緒について宋儒の学を批判する。	程朱が出てからもろもろの葛藤が起こったというコメントをのせる。	歴代の通儒が会合し、遺文を考証している場に士人が出会う。新説の非を教えられる。	士人が山の神に会う。鬼神の徳も二氣の屈伸でかたづけてしまいう宋儒を批判する。	

陽録 深統	之聽妄姑		志 雜 西 槐				聞 我 是 如				
一	3	2	4	4	4	3	4	4	4	3	3
一	34	35	46	25	9	63	55	22	21	71	68
なし	河間有游僧	董曲江前輩言	先師陳白崖	許文木言	董曲江言	申丈蒼巖言	族侄肇先言	劉香畹言	姚安公言	吳惠叔言	晉殺秦謀
	講学者	講学者	業師	老僧	儒生	書生	書生	老儒	老儒	医者	佃戸 老儒
		狐女	鬼		狐女	狐	叟	狐		冥官	
				余謂各以本教而論、…各修某本業可 矣、							余謂天錫自以氣結尸厥、誓不知人、 某家誤以爲死耳、非眞死也、號太子 事載于史記、此翁未見耶、
	講学者がでたらめな訟牒を作る。	厳しい講学者がその生徒たちに本 性をあばかれる。	宋儒を篤く信ずる儒者の正しい行 い(本則のみ批判でない)。	僧と儒者たちの閑談。	儒生が狐にやりこめられる。	ある二人の書生は狐に新説を用い ないことを教えられたおかげで試 験で上位の成績がとれる。	聖賢ぶっている儒者を批判する。	老儒が狐にからかわれ、講学の気 焰がなえてしまう。	「この兩は何の理だ」と聞かれた 老儒が「子不語怪」と答える。	理屈をこねる融通のきかない医者 の話。	程朱を聖人と敬う老儒を論駁する。

二

宋儒批判にも大別して二つのタイプがある。ひとつは通常では考えられない不思議な話を紹介した後、そのコメントとして「宋儒はすぐに『理』と言うが、これはどう考えるつもりであろうか」といった軽い皮肉を述べたものであり、もうひとつは人から聞いたという物語風の話にせよ、自らが表に出て論ずるにせよ、話全体が宋儒・宋学の批判をテーマにしているものである。後者についてさらに言えば、例えば「河図洛書」や孫復の『春秋尊王発微』といった具体的な問題に矛先が向いているものもあれば、漢学と宋学を比較するといった総括的な議論に話が及ぶものもあるが、いずれにせよ、そうした作品に紀昀の宋儒に対する態度がより明確に表われている。

ここではまず、宋元代の春秋学を背景に持った、最も批判の痛烈な「槐西雜志」卷第二十三則を取り上げる。

尚、これからの話の紹介のしかたとして、本旨に関係する重要な箇所、かつ論説調のものは書き下し文で、重要であるが小説風な部分は訳で、特に全文を挙げる必要のないものは要約の形で示すことにする。

相去ること数千里、燕趙の人を以て滄黔の俗を談じ、而して是の土に居る者、吾の知る所の確かなるに如かずと謂う。然るや否や。晚出すること数十年、髻鬣の子を以て耆旧の事を論じ、而して其の人に見ゆる者、吾の知る所の確かなるに如かずと曰う。然るや否や。左丘明、身は魯史たり、親しく聖人に見ゆ。其の『春秋』に於けるや、確かに源委有り。唐の中葉に至り、陸淳の輩、始めて異論を持す。宋の孫復以後、哄然として佐け闘い、諸説争鳴、皆左氏信ずべからず、吾が説信ずべしと曰う。何を以て是れに異なるか。蓋し漢儒の学は実を務む。宋儒は則ち名を近くす。新義を出ださずんば則ち聳聴すること能わず。旧説を排せずんば則ち新義を出すこと能わず。諸経の訓詁は皆、口弁を以て相争うべし。惟だ『春秋』の事跡は釐然、変乱すること難し。是に於いて、左氏は楚人為

り、七国初めの人為り、秦人為りと謂い、而して身は魯史たり、親しく聖人に見ゆの説揺らぐ。既にして身は魯史たり、親しく聖人に見ゆに非ずんば、則ち伝中の事跡、皆据るに足らず、而して後は惟だ言わんと欲する所のまゝなるべし。

まず、この冒頭部分において、『春秋左氏伝』を疑って経に独自の解釈をつけてしまふ宋元代の春秋学のありかたを厳しく批判している。『論語』公冶長には、「子曰く、巧言、冷色、足恭、左丘明之を恥ず、丘も亦た之を恥ず」と見え、また『史記』十二諸侯年表序には「魯君子左丘明、弟子の人人に端を異にし、各々に其の意に安んじ、其の真を失うを懼る、故に孔子史記に因りて具さに其の語を論じ、左氏春秋を成す」、『漢書』藝文志には、「丘明と孔子魯史を觀、而して春秋を作る」、『漢書』劉歆伝には「左丘明好惡聖人と同じくし、親しく夫子に見ゆ」とあるように、この左丘明が左伝の作者であるとするのは、古來學者の定説であつた。

ところが唐の中葉になつて、陸淳(字は伯沖)が異論を持ち出した。陸淳は趙匡に師事、趙匡は啖助を師とした。この三家の説は今、陸淳の著『春秋集傳纂例』十卷、『春秋微旨』三卷、『春秋伝弁疑』十卷⁽²⁾にて見ることができ、例えば『春秋集傳纂例』卷一・趙氏損益義第五に、「左氏決して夫子と時を同じくするに非ざること亦た已に明らかなり」「古より豈に一邱明有らば左と姓するに止まらんや、何すれば乃ち左氏と題するを見れば、悉く邱明と稱するや」とあるように、左氏は孔子と同時代の左邱明ではないとする。そして宋の孫復(字は明復)以後、諸説争つて左氏を否定する説を出した。

ここまで『春秋』史をたどつてきて、紀昀の考察が始まる。漢儒の学は実を務めるものだが、宋儒は名譽を求めようとするので、旧説を排し、新義を出さなければ人に聞いてもらえない。諸経の訓詁については弁舌の巧みさで競えるが、『春秋』の事跡は歴史だから整然としていて変えられない。そこで左氏は楚人であるとか、七国初めの人であると

か、また秦の人であるとかいい、従来の説を揺がした。もう左氏は魯の太史で親しく聖人に見えたのではないから、左伝の事跡は依るに足らず、言いたいことが言えるのである、と。

そして本文はそのひどい例として、次のように続く。

沿いて宋の季に及び、趙鵬飛は『春秋経筌』を作り、成風は僖公の生母たるを知らざるに至る。尚、與に名分を論じ、褒貶を定むべけんや。

「成風」が何者であるかを晋の杜預の注『春秋経伝集解』で見ると、閔公二年の左伝「成風、成季の繇を聞き、乃ち之れに事えて僖公を属す、故に成季、之れを立つ」の注に、「成風は莊公の妾にして、僖公の母なり」、文公四年「冬十有一月、壬寅、夫人風氏、薨す」の注に、「僖公の母、風は姓なり」とあり、莊公の妾、僖公の母ということになる。

一方、趙鵬飛(字は企明)の『春秋経筌』⁽³⁾ 卷八、「(文公四年) 冬十有一月、壬寅、夫人風氏、薨す、五年春、王正月、王は榮叔をして舍を帰り、且つ贈せしむ、三月、辛亥、我が小君成風を葬る、王、召伯をして、来りて会葬せしむ」の注には、隱の世の仲子の解釈のしかたを例として引き、そこで「天王、宰咺をして、来りて恵公仲子の贈を帰らしむ」とある仲子は、「恵公の妾の仲子」の意味であって、恵公の母とする者もあるが、どうして聖人が子を母の前に出すことがあろうと述べたあとに、「(文公) 九年に『秦人來りて僖公成風の櫓を帰る』と書すは則ち恵公仲子の文と同じ、成風は蓋し文の母にして僖の妾たるや審かなり」とする。この解釈に対し、紀昀はこんな男とはいっしょに名分を論じ、褒貶を定めることなどできぬ、と痛烈に批判する。

そして最後に「小説」らしく幽霊を登場させて次のような話に続く。

元の程端学(字は時叔)はさらに輪をかけてひどく、道理に悖ることこの上ない。私がたまたま五雲多処(原心亭)で程端学の『春秋解』⁽⁴⁾を校閲していると、周書昌編修(名は永年)がこんな話をした。

ある士人が端学のこの書を手に入れ、貴重なものとして大切な宝物にしていた。ある日、友人と泰山へ行った時のこと、たまたま話が経義に及び、そこで叔姫が鄆に嫁いだことに関して程端学が論じていることを、理を推し極めて精なるものとはめたたえた。その夜、古えの装いをしたひとりの婦人を夢に見た。護衛の兵士も厳かに、きつと怒ったさまをして士人を詰って、

周の武王の第一皇女様は、実は泰山の主なのです。上帝は私が苦難に会いながらも節を全うしたというので、私を共姜(5)の後任とし、皇女様付きの貴神とされて、今二千年余たちました。きのうおまえはつまらぬ学者(程端学)の説を述べたてて、私は鄆に嫁いで紀季と身分違いの結婚をしたなどと言っていました。根拠のない言い草、実に私の心を痛ましめます。私は隠公七年に紀に嫁ぎ、莊公二十年に鄆に嫁いだから、その間は三十四年、とうに五十歳は過ぎています。白髪まじりのやもめ女なのに何で紀季が私などを喜びましょう。国を越えて相従うということについては、春秋の法では諸侯の夫人でなければ書きません。卿でなければ書かないのと同じです。私は魯国で年を長ずるのを待ってから紀に嫁いだ賸です。ふつうなら経になど記載されません。ただ私のあくまでも紀の国に付き従おうと誓った心が違わなかったので、孔子は特別に私のことを書いたのです。程端学はどんな根拠があつてこんないい加減な誘りを作ったのでしょうか。おまえがまた、でたらめなことを言い伝えたら、おまえの舌を切身にし、従神に命じて骨朶(宋代の兵器)で打ちのめしてやりましょう。

士人はわぁと叫んで夢から醒め、その本を破いてしまった。

私は戯れに書昌に「君は宋学に耽っているのですこんな作り話をしたのだね」と言うと、書昌は「私は宋学の長所を取りますが、敢えてその短所を隠すこともしません」と答えた。これこそ公平な論と言えよう。

叔姫について『春秋経』『春秋左氏伝』『春秋経伝集解』で見ると、魯公の娘で、隠公二年に紀侯に嫁いだ伯姫の妹で

あり、しかもその媵としてやはり紀に嫁ぐが、当時はまだ幼なかつたので魯国で五年間過し、隠公七年に紀侯に嫁ぐ、ところが紀の国は斉に悩まされ、莊公三年に紀侯の弟の紀季が紀の邑である鄆を持参の領地として斉に帰属したことから、紀の国は分裂し、翌四年には紀侯が国を去ってしまふ。そして莊公十二年、鄆つまり紀季に嫁ぎ、同十九年卒す、ということになる。

一方、叔姫が鄆に嫁いだことに関して、程端学が論じていることは、『春秋本義』卷七、「(莊公)十有二年、春、王三月、紀叔姫、鄆に帰ぐ」の注に見える。それによると、「帰と書いてあるのは、帰ぐべきでないということである」という宋氏の説、「叔姫は父母の国(魯)に帰るのがよい」という杜氏の説を引いたあと、自らの意見として「君主が国のために死ぬのなら、その兄弟、臣下、妾も当然殉すべきである。紀の国はすでに滅んでしまったのだから、叔姫はそれに殉じて死ぬのがよい、兄に背いた弟(紀季)につくとは節を失うにもほどがある」と述べている。

この解釈のしかたに対し、「孔子が本来なら記載されることのない伯姫の媵である叔姫を経に特筆したのは、その鄆に嫁いだ行為を称える意味で書いたのだ。端学の言うような貶の意味で書いたのではない」ということを幽霊の叔姫に言わせることによって、紀昀は大いに論じているのである。

以上この則全体を通して見ると、冒頭部分では紀昀が直接前面に出て、宋代の春秋学のありかたを論じ、次に具体例として、張鵬飛と程端学の解釈のしかたを批判している。特に後者には、小説らしい構成にして強くその非を印象づけるといふ手法をとり、全体として経に勝手な解釈をつけてしまふ宋元代の春秋学を痛烈に批判している。

ところで、『闕微草堂筆記』のこの話に見える議論が、実は『四庫全書総目提要』の中にも見えるのである。

まず、程端学の『春秋三伝弁疑』(経部春秋類三)の提要には、要約すると次のようなことが述べられている。

思うに左伝、公羊伝、穀梁伝の三伝を信じないとする説は、啖助、趙匡に始まった。後は分れて、孫復以下伝を棄

てはするがその失を指摘するまでには至らなかつた派、劉尚以下三伝の義例を否認する派、葉夢得以下三伝の典故を否認する派の三派となつた。程端学に至つてはこの三派を兼ね合せ、しかも左伝は偽撰であるとし、ここに至つてその横流は極まつた。心を平らかにして論ずれば、左氏は魯の太史でその記録は最も確かなものである。……それを退けて信じられないとするならば、この世に信じられる書などない。

また、趙鵬飛の『春秋経筌』の提要（経部春秋類二）には、啖助、趙匡は三伝を非難して異説を唱え始め、孫復に至つて旧文をすべて棄て去り、ついに春秋を研究するものにこの上ない弊害を残した、と述べたあと、

張鵬飛のこの書もまた、孫復の流派である。その最もお粗末なのは、「経に成風とあるのは莊公の妾なのか、僖公の妾なのか知らない」として疑問に付していることである。

と見える。

さらに程端学の『春秋本義』の提要（経部春秋類三）には、

紀の叔姫が鄆に嫁いだことに関しては、旧は皆、叔姫が紀の国の盛衰によつて志を変えず、夫の族である紀季に嫁いだとして褒めている。端学は絶対に魯に帰るべきだ、鄆に嫁ぐべきではないとしている。これは人情を解さないものである。そしてまた、節操を紀季に失つたなどとありもしないことを言う。これは何に依つたのだろうか。と述べられている。

『提要』の方が公的な書物だけに堅く、論評調で詳しく説明されているのに対し、『閔微草堂筆記』では、同じことを論ずるにしても割と自由に論じており、書き出しは随筆風に比喻で始まり、『春秋本義』の提要で述べられている内容はそっくりそのまま、怒りに満ちた幽霊の叔姫に言わせるなど、小説的手法をフルに駆使しているのは当然のことだが、『春秋三伝弁疑』の提要の内容、論の持つて行き方や『春秋経筌』『春秋本義』の提要で指摘している具体的な例

の箇所は『閱微草堂筆記』のこの話と全く同じなのである。

『四庫全書総目提要』という、公の著書の中で述べたことを、この「小説」のこの話の中で再び取り上げるといふこと、それはこの宋元代の春秋学のありかたがいかに紀昀にとって鼻持ちならぬ問題であったかを示す。言い換えれば、紀昀にとってそれだけ執拗にこだわるだけの価値がここにはあるのではなからうか。さればこそ、「小説」であるこの書の中で、かくも真正面から真剣に論じているのであろう。

三

「槐西雜誌」卷一第六則も宋儒・宋学の問題を扱った話である。

「石中物象、往往有之」（石の中に物のかたちが見えるというのは往々にしてあるものだ）で始まるこの則は、始めに清の姜紹書（字は二酉）の『韵石軒筆記』には大極図をなしている石を見たとあるが、これは石の紋理がぐるぐるとなっていて、たまたま白黒に分かれたのだらうということを述べ、次に顔介子（未詳）がかつて実際に紀昀に見せてくれた英徳の硯の話をする。その硯の上には白い筋で、東坡の「後赤壁賦」の句、「山高月小」の四字が、はめこんだのでもなく、彫ったのでもなく、染めたのでもなく、まさに天成のものとして書かれていた、と言う。こうした話の後に、「河図洛書」の問題が取り上げられている。

世に伝う河図洛書は北宋に出たもので、唐以前にはまだ見なかったものである。河図は黒白の圈五十五、洛書は黒白の圈四十五を作る。孔安国の『論語注』を見ると、「河図は即ち八卦」という。これは孔氏の門に、もとの十五点の圈がなかったということである。宋の陳搏は何によってこれを得たのであろうか。洛書に至っては、これを「書」というからには当然文字があるべきなのに、また四十五圈であって、河図と同じである。これは「洛図」

と云うべきであつて、「書」と云うことはできない。言うにことかいて又どうしてこれを別にして「書」と云うのであろうか。劉向、劉歆、班固は皆洛書に文有りと言ひ、孔穎達の『尚書正義』にはその字数を詳しく載せる。

『尚書』洪範の「初一日五行」一章の疏には次のように言ふ。⁽⁶⁾「漢書五行志にはこの一章を全部載せて、さて『この六十五字全部がみな洛書の本文である』という。しかし天の言葉というものは簡単な筈だ。番号の数字なんかはなかつたに相違ない。『初一日』などの二十七字は、あとから禹が加えたのに相違ない。次に『敬用』とか『農用』とかの十八字については、劉焯と顧氏は亀の背に最初からあつたとし、合わせて三十八字だとする。劉炫は『敬用』なども禹が配置したものと見、亀の文字は二十字きりとする云々」。説く所の字数は異なるが、漢から唐まで洛書に黒白の点の偽図がなかつたことを見るに足るものである。

このあと再び硯の話にもどり、まちがいはなく石の紋が字を作っている硯を我が目で見て見ると、今の占い師が使う洛書、すなわち太乙行九宮法も神禹の受けたものではないかと思えてくる、ということを書いて終わる。

話全体を通して見れば、まず『韵石軒筆記』に見える太極図の模様のある石を取り上げ、これに対しては否定的な見方をし、次に「山高月小」の文字が浮かんでいる硯を自分の目で見、天巧の妙に驚き、そこで河図洛書の偽であることを証明はしたが、やはり常理では考えられない現実を見せつけられて、宋の河図洛書もまんざらでたらめでもないと思えてきたと皮肉って終わるところが小説らしいと思える。しかし河図洛書について論じている部分を見ると、孔安国の『論語注』⁽⁷⁾に「河圖八卦是也」とあること、劉向、劉歆、班固が皆洛書に文有りと言っていることを挙げ、さらには孔穎達の『尚書正義』にその字数を詳しく載せていることを、自注の形でその原文まで引用して、これらを論拠として、宋儒が一般に信じていた河図洛書が偽ものであることをここでいわば考証しているのである。この部分だけを取り出して見れば、とても小説とは思えない内容であり、学者紀昀がその本領を大いに奮って宋儒・宋学と真剣に真正面から取り組み、これでどうだと言わんばかりに論拠を挙げて批判している姿が、やはりここでも伺えるのである。

四

ここでさらに少し趣きの異なった話を簡単に取り上げて見よう。「灤陽消夏録」巻第二十一則の話である。

この話の前半は、朱子穎(名は孝純)から聞いたというもので、泰山の奥深くで突然美しい宮殿樓閣に行きあたった士人が、ひとりの耆儒に、ここは「経香閣」という所で、その名の由来は、宋以後、日々新説が起こり学が絶えるのを憂えて十三経注疏を始め、歴代官刊の書、各家私刊の書、唐以前の諸儒の経義を収めたところ、これらの諸本が夜中濃香を発するところからきたのだ、という説明を聞いた話である。

紀昀は一度この話は漢学を尊ぶものの寓言だろうと述べてから、漢学と宋学を比較検討した自説を述べ始める。そこでは、宋儒が漢儒を攻めるのも、後人が漢儒を攻めるのも、経を説くために意見を起こすのではなく、ただ相手に勝ちたいがためなのだ、従来の批判のありかたを戒めてから、

『尚書』『三礼』『三伝』『毛詩』『爾雅』の諸注疏については、漢儒は皆古義に基づき、断じて宋儒の能くするところでない。『論語』『孟子』については、宋儒は一生の精力を尽して字句を斟酌し、漢儒の及ぶところでない。漢儒は師伝を重んじ、宋儒は心悟を尊ぶ。漢儒のある者は旧文に固執して伝を信じ過ぎ、宋儒のある者は臆断にまかせて経を安易に改めてしまう。両者の得失は五分五分というところだが、ただ漢儒の学は書を読み、稽古をしなくては一語も語れない。宋儒の学なら誰でも空談することができる。

と述べている。

ここでは、先に紹介した二つの話とは少し異なり、宋儒・宋学を批判するだけでなく、漢学と比較しながらそれぞれに良い点、悪い点を挙げ、総合的に学問を論じている。紀昀としては、宋儒にしても、宋儒を批判する者にしても、た

だ自分の意に反する者を打ち負かそうとばかりして、本来の学問の目的を忘れてしまっている輩が目にあまるのである。それでも漢学は書を読み、稽古を積んで、基礎が出来なければ一語も語れないが、宋学は誰でも空談が出来る。そんな学問の方法をとっているから物笑いになることも出て来てしまうのだ。そう言って結局ここでは漢儒の学に軍配を上げているようだが、この辺に紀昀の考えがほの見える。

以上これまでの数例の話のみで紀昀の学問論を云々するのは早いが、ただこのように、総じて宋儒批判の話の中に、多く学術的なことに関して論じている箇所が見うけられる。そこでは単に宋儒だからと言って頭から批難の対象にするのではなく、相手の良い点も認めるといふ公平な立場をとった上で、その許し難い方法——従来信じられていた伝をあっさりと否定し、経に勝手な解釈を施したり、あるひとつのことを前提に勝手な空論をどこまでも広げていってしまうというやり方——に対し、執拗なまでに攻撃を加えている。その攻撃のしかたも、小説でありながらきちんと論拠を挙げ、まさに学問的方法を踏まえている。そこには宋儒と熱く議論を戦わせ、真剣勝負をしている紀昀の姿が浮ぶのである。

五

紀昀の学問論を論じる上で重要なものに、もうひとつ俗儒批判というものが存在する。どのように俗儒を批判しているのだろうか。まず、「灤陽消夏録」巻二第三則の話を紹介する。

ある塾師が月の明るい夏の夜、弟子を連れて河間献王の祠のわきの田のあぜ道で夕涼みがてら、そこで『詩経』の科挙模範解答を講じたり、弟子達に『孝経』を朗読させたりしていた。ふと顔を上げて祠の門のわきの木の下を見ると幽霊がいる。前に出て姓名を尋ねると、毛萇、貫長卿、顔芝(9)と言い、河間献王に謁するためにここに来たと言

う。塾師は大喜びで再拝し、経義を授けていただきたく願ひ出た。毛萇、貫長卿の二人は共に「あなたが講じているのをたまに聞いたが、私達の解釈とは全く異なるので、お答えのしようがない」と言う。塾師は又、拝した。毛萇、貫長卿の二人は「詩の義は奥深いものなので、下愚に教えを授けるのは難しい。顔先生にちょっと孝経を講じていただこうと思うが、どうであろうか。」顔芝は振り返ってこちらを向いてから「あなたの弟子が朗読していたのは語句が抜け落ちたり、ひっくり返ったりで、私が伝えたテキストとは全く異なる。私も何も言うことができない」と答えた。にわかには河間献王のことばを伝えて「門の外に人の酔った声がするようだ。先程から耳ざわりだから追い払いなさい」と言うのが聞こえた。私はこの話と、愛堂先生（未詳）が語った学究が冥土の役人に会った話とは、どちらも博雅の士が戯れのことばを作って、俗儒をそしめたのではないかと思う。しかし隙があるから突き込まれるのではないだろうか。

この話は俗儒の典型と思われる塾師と、毛萇、貫長卿及び顔芝の幽霊が登場する物語構成になっている。塾師がこれら一流学者の幽霊に教えを請うと、幽霊達はその解答を拒否してしまい、教えを授けない。つまりここでは宋儒批判に見られたような激しい議論に発展する余地は全くないのである。

続いて本文に「愛堂先生言う所の、学究、冥吏に遇いし事」とある話を簡単に紹介しよう。

これは「灤陽消夏録」巻一第三則の話であり、人間の学問の深さを、その人が眠っている時に発する光芒の輝きや大ききさによって見分けることができるという亡友に出会ったある老学究が、「私は一生書を読んできた。私の眠っている時の光芒はどの位だろうか」と聞くと、その亡友は、

きのう君の塾の前を通ったら、君は昼寝をしていた。君の胸中には頭注付きの四書一部と科挙の答案が五六百篇、经文が七八十篇、策略が三四十篇、字々黒煙と化して屋根の上にたちこめていた。生徒達の誦読の声は、濃雲密霧

の中にあるようで、光芒は見えなかったよ。

と答えた、という話である。

この話も先と同様、幽霊が登場する物語構成になっている。この幽霊が、一生の読書＝科擧の受験勉強と思い込み、自分も一端の学者きどりである老学究の真の姿を露いているのである。彼らは科擧の試験勉強のためだけに経書を暗唱し、しかも語句が抜けていたりひっくり返っていたりして、本来の経文とは大分異なっている。一切おかまいなし、という読書態度をとっている。そんな俗儒に対する批判には、先の話の末尾に「博雅の士、戯語を造りて以て俗儒を誘るなり」とあるように、まともに取りあってはられないから、ひとつからかってやろうとでもいうような、俗儒を軽くあしらっている態度が見うけられる。

さらに一例を示せば、幽霊などいないと言い、朱子の陰陽二氣説を滔々と説く老人の説に、宋儒こそ理を極めたものだと感じ入った老儒二人が、その老人自身が幽霊だったということだからかわれたという「灤陽消夏録」巻一第十四則の話などがある。ここにも、名も知らぬ老人の弁にすぐに飛びつく底の浅い俗儒の姿が描かれている。

およそ俗儒批判の話は、これらの話に違わず、幽霊や孤、他の人物が登場させ、その者達が俗儒をからかうという構成になっている。一生読書に励み、一端の学者きどりである俗儒達が、名もない幽霊や孤、お布施をもらいに来る僧等、彼らにしてみれば自分達よりも低級と見下していた者たちにひと泡食わされたり、彼らより高級な学者達には全く相手にされなかったりする話を書き連ねていくことで、彼らの真の姿が露かれていく。ここでは、先の宋儒批判の話のように、紀昀自身が話の表面に出て、直接手を下すということはほとんど見うけられない。そこには俗儒を批判するには戯語で十分、俗儒などとまともに議論する筆は持たないという、徹底的に俗儒をさげすんだ紀昀の態度が見られる。

六

さて、ここで宋儒批判、俗儒批判という個々の話の中で見えた学問論ないしはその姿勢を手がかりとして、紀昀の考える真の学問のありかたとはどういうものであったかを探るべく、一考察を試みたい。

概して宋儒批判の話に於ては、紀昀も自分の本領を大いに発揮して、経の一語一句の解釈から総合的な学問論に至るまで、精根傾けて論じている。一方俗儒に対しては、すっかりさめきった様子で、おもしろ半分からかっているような傾向が見られた。この違いはどう考えたらよいのだろうか。

当時の俗儒たちのやっていることは、ただいたずらに経書を記誦するだけで、何の得るところもない記問の学であった。経の字句が抜け落ちていても、ひっくり返っていても、いっこうに気づかず、意味もわからずに暗唱しているだけであったが、俗儒たちはそれが学問だと思っていた。そんなものは紀昀の目からすれば、学問でも何でもなかった。ところがそうした俗儒たち、中でも典型的なのが塾の教師であろうが、その者たちだけが科挙という制度に乗じて世の中に迎合し、それなりに有難がられ、尊敬され、学者の如くに扱われていた。それが紀昀にとっては何よりも耐え難く、許せないことだったのでしたのではなからうか。四庫全書の総纂官となり、『四庫全書総目提要』の撰に力を揮うという一大事業を成し遂げた紀昀だからこそ、その俗儒の本来の姿が見えるのであって、凡人にはそれがわからない。そこが非常にもどかしかったのである。しかし、そんな俗儒と対等に取り組み、その学を正直に批判するには紀昀のプライドが許さない。だから徹底的にからかってやったのである。紀昀の考える学問にとって、許すべからざる最大の敵というのは、そうした俗儒たちではなかつたらうか。

一方、宋儒に対しては、紀昀も腰を据えて論を戦わせていることから、一応宋儒を学者として認めていたと思われ

る。宋儒・宋学をテーマとした話の中で多く学問論を述べていることからみても、宋儒とやら学問について話ができる、といったところか。少なくとも俗儒より次元の高い存在であることは確かである。ただ、その学問の方向、つまり經典に勝手な解釈を施したり、あることを前提に据えたら、それをもとにどこまでも空論を広げていってしまうやり方に納得できなかったのである。

ただ、紀昀は確かに宋儒と俗儒を明確に区別して、それぞれをそれぞれの方法で批判してはいるが、そうすることが彼の究極の目的であるとは思えない。彼はそのような枠を越えた域に存在しており、もっと広い視野から見て、およそ学問のあるべき姿から、はずれてしまっている者に対して怒りを感じているのである。

そしてさらに言えば、そうした者たちに反省の念を促し、真の学問の目的並びにその方法を見出させる契機のようなものが、この『閱微草堂筆記』に含まれているのではないかと思う。紀昀ほどの人物が唯一残した著書が、この「小説」であるということ、これは一見すると「自序」で言うように「老人の手すさび」的な、消極的な意味にとられがちであるが、実はこんな「小説」にすら厳格な体例と内容を折り込むことが要求されるものであり、それはこのとおり可能なことなのだとすることを、自らこの作品によって多くの「偽」学者たちに提示してみせるという、積極的な意図がこれには潜在しているのではないか。

このことは学術的な論文ではない『閱微草堂筆記』という「小説」の体裁を借りたればこそ表出できたのであり、そこに紀昀という人物の学問の奥深さ、学問に対する姿勢の厳しさを見出すことができるのである。

注

(1) 『閱微草堂筆記』は当初、「灤陽消暑錄」六卷、「如是我聞」四卷、「槐西雜誌」四卷、「姑妄聽之」四卷、「灤陽統錄」六卷

『閱微草堂筆記』に見る紀昀の学問論

と、各々単行本で刊行されていたのを、嘉慶五年（一八〇〇）に門人の盛時彦が紀昀にこれら五書を合わせて一編とすることを請い、同二十一年（一八一六）に重刊して『閱微草堂筆記』二十四卷となったものである。各自序が書かれた年代は以下のとおりである。

- 〔灤陽消夏録〕…乾隆五十四年（一七八九）
- 〔如是我聞〕…乾隆五十六年（一七九一）
- 〔槐西雜誌〕…乾隆五十七年（一七九二）
- 〔姑妄聽之〕…乾隆五十八年（一七九三）
- 〔灤陽統録〕…嘉慶三年（一七九八）
- (2) 以上の三書は「古経解彙函」所収。
- (3) 「通志堂経解」所収。
- (4) 「通志堂経解」所収の『春秋本義』を指す。
- (5) 『詩経』鄘風・柏舟序によると、共姜は衛の君主僖侯の太子共伯の妻で、共伯が亡くなったあと、里方の親から再婚をせまられたのを拒絶した。
- (6) 以下疏の部分は、吉川幸次郎訳『尚書正義』を引用。
- (7) 『論語』子罕篇の「子曰わく、鳳鳥、至らず。河、図を出ださず。吾れ已んぬるかな」の集解。
- (8) 漢の劉徳の封諡号。後に出てくる毛萇は河間献王の博士である。
- (9) 両者とも「毛詩」を受け伝えた。
- (10) 『今文孝経』は秦の焚書の際、顔芝の蔵していたものである。